

はじめに

『教育方法の探究』も第 17 号を数えるに至った。これまで『教育方法の探究』は、教育方法学講座を構成する教育方法と発達教育の二つの研究室の紀要であったが、本号から、教育方法研究室の紀要として刊行されることとなった。それに伴い、【特集】や【書評】のコーナーも新たに加えて、紀要の構成もリニューアルした。

最初の特集として、京都市立高倉小学校と教育方法研究室との間で 11 年にわたって継続している共同授業研究（プロジェクト TK）が取り上げられている。プロジェクト TK の詳細は特集の各論文に譲りたいが、私自身、院生時代にこのプロジェクトの立ち上げに関わり、小学校と研究室の双方にとっての互恵性や取り組みの継続性をどうデザインしていけばよいのか、当時の研究室のメンバーで知恵を出し合ったものである。そうして手探りで始まった取り組みが現在も続き、『教育方法の探究』の特集のテーマとなるのは、感慨深いものがある。

人間の能力や教育という営みに対して過剰なまでの期待がかけられる一方で、学校という組織に対する不信が広まっている状況において、学校現場はますます厳しい状況に置かれている。そうした現場の困難を共有し、それに対して研究者だからこそ担いうる責任を自問し、現場を側面からサポートしていくこと。そして、困難の中での教師たちの実践や子どもたちの学びの中に明日への希望を見出し、それを形にしていくこと。学校現場に関わる研究者には、今まで以上にそういった役割が求められるだろう。

教育方法研究室として、現場を力づけられるような理論的・実践的研究を進め、その成果が『教育方法の探究』において蓄積されていくことを期待している。

なお、この紀要第 17 号は、科学研究費補助金・基盤研究（C）「思考力・判断力・表現力育成のための長期的ルーブリックの開発」（研究課題番号 25381022 平成 25 年度～平成 27 年度・研究代表者：田中耕治）からの支出により刊行する。

2014 年 春

教育方法学講座准教授

石井 英真